

26. 二、三年前郷里へ還ったとき、原の中の松の大木に啄木鳥が巢食った話を



聞いた。それを近くに棲む鳶が見つけて、次々に雛を攫って去ったそうであるが、その鳶の姿が現れるたび、親鳥が悲しい声で鳴き廻るのが、あまりにも無惨で見えはられない。何とかして助けてやりたいにも、高い梢の上で手の施しようもなかった。あれを見ては滅多に鳥も

撃たれぬと、見た一人の鉄砲打ちの述懐であった。

27. ごしん鳥せきれいというのは鶺鴒せきれいのことであった。庚申様のお使姫だから、決して捕ったり悪戯をしてはならぬと警められたものである。これに腹に羽毛の白いのと黄色いのがあって、黄色の方が雄だともまた、黄色のがほんとうのごしん鳥だともいった。チッチチッとつづけて鳴きながら、遠くから宙に大きく山形を描いて翔んで来た。窓の前の石垣に降りて、忙しく尾を振りながら何かをしきりにあさっている時など、そっと物陰に隠れたりしたものであった。



じっと動かないでいると足許まで平気で餌を拾って近づいて来る。追っても遠くへは遁げない。他の鳥とはどこかかわったところがあった。

28. 翡翠かわせみをしょうびんかわせみと叫ぶが、魚を巧みに捕り、水潜りの巧者をまたしょうびんかわせみと言った。このしこ名を持つ男があった。何処の生まれか村に知るものがなかったが、水死人があつて死骸の判らぬ時など、この男を頼んで捜索してもらったものであった。



かわせみ

翡翠の巢は川端の崖などに横穴を穿って、巢の繞

なめくじ

りにきまって蛞蝓なめくじを這わせ、その跡が白く幾重にも附いている。これは蛇を防ぐ目的だといった。どうして蛞蝓なめくじを連れて来るのか、子供心に解けぬ謎であった。村の茂八という若いヒヨウ（材木流し）は悪戯

者で、鶉の頸の淵の近くにその巣があるのを発見して、崖を這い登って近づくと、巣の口から雌雄二羽の親鳥が頭を揃えてじっとしているのに、さすがに掴むことも出来ずに引き下がったと語った。蛞蝓のことをおんじょろさま（御女蔭様）といった。

29. 水恋鳥が鳴くとかならず雨が降るといった。夏のはじめ呼子の笛を吹くような声で啼く。「水恋鳥が啼くで雨はもう近いぞナ」などといったものである。伝説ではこの鳥の前世は下女であった。常々馬に水を飼うことを言いつかっていたが、主人の留守にそれを怠った罪で鳥に生まれて来た。日照りが続いて口が渴くので、川に降りて水を呑もうとすると、己の赤い体が水に映って火に見えて呑むことが出来ない。それで梢に上って空に向かって雨を喚ぶ。雨が降ればその滴で咽喉を潤しているのだ…と。

30. 同じ小鳥の中でも山雀は眼白のようにたやすくは捕れない。どうかすると罟で捕ることもあったが稀であった。それで雛を捕って育てねばならない。そういう点が子供の手に負えなかった。そればかりではない、鳥籠も眼白のように簡単でなかった。芸でも仕込もうと思えば、手造りでは旨くないから、籠屋を煩わさねばならない。しかし中には前言う素麺の空箱を加工して容れておいた。餌は櫛しきみやくさぎの実であった。くさぎの実をびしゃの実と言ったが、これは殻が特別に堅い。山雀が止り木の上で両脚を押えて、コンコンと嘴で叩くのが見ものであった。小鳥を飼うことは子供たちの領域であったが、どこの家でも親たちが熱心で、何かと世話を焼いていた。

山雀とちがって、眼白の方は餌がはるかに楽であった。さつま芋を蒸してそれを籠の上に置けばよかった。眼白が箱の上に掴まって、逆さになって食べる。さつま芋を与えると、芋そのままの糞が止り木の下にうず高く積もって、下積みのところが青くかびが来たりした。また、蜜柑を二つに切って、そればかり与えたりした。山の果物は好んで食ったが、きさかきの紫の実は特に喜ぶように思った。きさかきを方言でキ



シャシャキといった。これを与えると糞の量は少ないが、紫色に黒ずんで来る。また、七かまどの赤い実も食った。これをズノミとって、山から伐って来た薪の中に、これの生った枝を見出すのは嬉しかった。かんざしのように紅い実がいっぱい

あけび

ついていた。霜が来てからは通草も採って来たが、これはもっぱら自分たちが食べて、眼白への分け前は少なかった。眼白が弱って来ると、体をまるくふくらませて止り木にじっとして動こうとしない。冬の朝など、寒いのだろうとあって陽向にだすが、やはりだめであった。健康な時なら陽に当たるとみるみる体が細くなって、活発に動いて啼くのだが、そうはしない。あるときじれったくなって、齒朶の弓で撃つと矢が腹に命中してころりと死んでしまった。チュウリンと二声鳴きの雄であった。